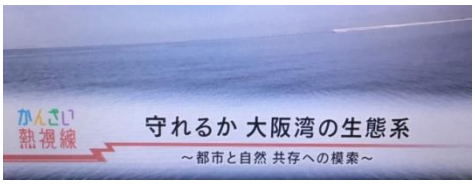
守れるか 大阪湾の生態系

写真は 7 月 1 日放送の NHK「かんさい熱視線」。番組案内から―絶滅危惧種や希少生物の目撃が相次ぐ大阪湾。都市開発で多くの自然環境が失われた海で、再生への取り組みが成果を上げ始めている。「魚庭（なにわ）」の海はよみがえるか―　空港付近の海を泳ぐイルカの仲間、「スナメリ」。人工島に営巣する渡り鳥、「コアジサシ」。大阪湾でいま、絶滅が危惧される生物の目撃が相次いでいる。都市開発により多くの自然環境が失われた海で、藻場や干潟など生態系の基盤となる環境を再生させようという取り組みが成果を上げ始めている。開発と自然保護の両立が問われるのは、万博会場の夢洲でも。生物多様性を守りながら建設整備をどう進めるか。岐路に立つ大阪の海。



番組は関西空港周辺から大阪南港野鳥園、夢洲へと、大阪湾の生態系の歴史と現状を追っていく。大阪・関西万博会場、そして大阪 IR カジノの予定地である夢洲の映像に注目した。

「鳥の楽園が万博会場に」なり、埋め立て工事により渡り鳥の数も減ってきた。いまでは「新島」に多くの鳥たちが見られるようになった。「SDGs」を標ぼうする万博が、鳥たちの居場所を奪い、夢洲の生態系を壊していいのだろうか。あらためて 2025 年万博のあり方を問いたい。

番組を見ていて、ネイチャーおおさかの呼びかけを思い出した。「40 年前から埋め立てられ始めた大阪湾の人工島『夢洲』では、次第に埋め立てられていく土地に草が生え、昆虫が棲み、鳥が集い、多様な生態系が生まれてきていました。この生物多様性豊かな環境は、大阪に偶然できた『たからもの』です。しかし、現在、2025 年万博のために急速に開発が進む夢洲。ここで生きるものたちはどこにいけばいいのでしょうか？　絶滅が危惧される生きものたちのほとんどは、夢洲で埋め立てが行われている万博予定地の池・湿地・ヨシ原で生息していました。が、半年のイベントのために、今、未来を奪われつつあります。」

（2022 年 7 月 4 日）